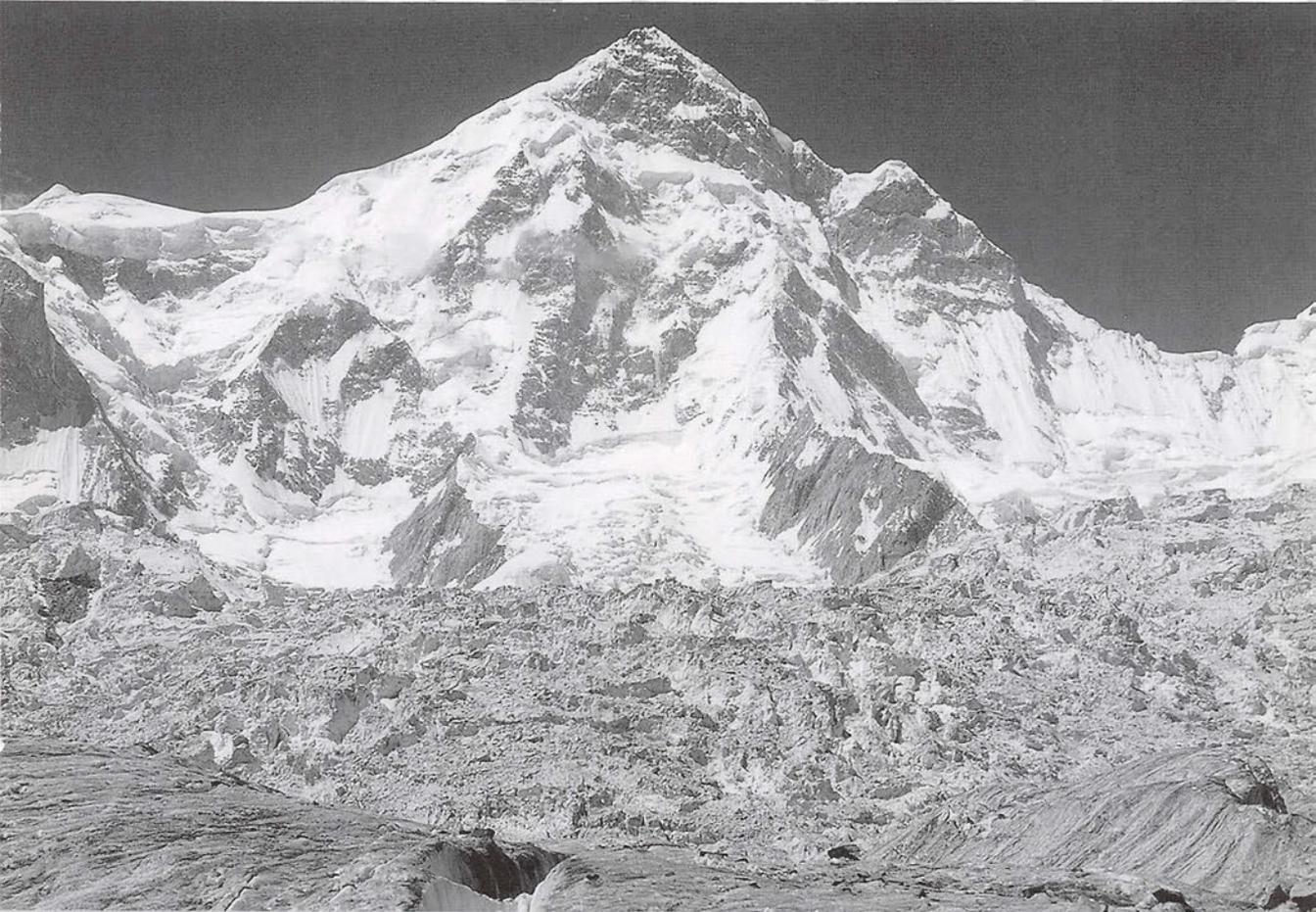


HIMALAYA

ヒマラヤ

No.385



2003 DEC



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN

日本ヒマラヤ協会

HAJ

2004年HAJサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2004年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しません。隊員による自力登山です。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2004年7月22日～8月27日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切：定員になり次第
6. その他：HAJの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

シスパーレ

2003年・HAJパサー登山隊のBCから見たシスパーレ(7,611m)。我々パサー隊はアイスホール帯にルートをとるが、常に雪崩のこだまするのは正面の壁から。初登頂は1974年西ドイツ・ポーランド合同隊により、パサー氷河から左手の稜線を経てなされた。(酒井國光)

ヒマラヤ No. 385

1. パサー峰登山と遭難の記録

HAJ パサー登山隊2003

16. ロー・マンタンの空、遥かなり(16)

高橋 照

22. PEOPLE

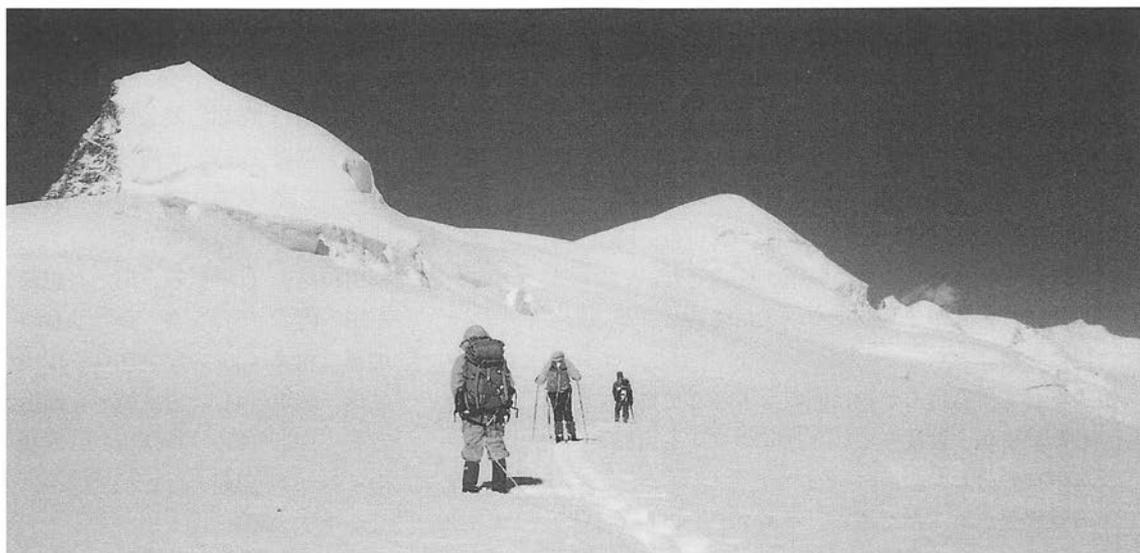
ナビン・ギミレ

23. ヒマラヤニュース〈地域ニュース・Books・ヒマラヤから〉

24. 寸感・事務局日誌

パサー峰登山と遭難の記録

H A J パサー登山隊2003



▲頂上プラトールを行く(左東峰、右主峰)

はじめに

日本ヒマラヤ協会では、会員の様々なニーズに応え、休暇の取りやすい夏期に、比較的短い期間で登れる山を目標としてサマー・キャンプを実施してきました。今まで対象の山は、インド・ヒマラヤ、中国、パキスタンと広範囲に広がり、大きな成果を挙げ、会員に好評を得て参りました。

2003年度のサマー・キャンプは中国・チベットのカンペンチン(7,281m)に目標を定め、隊員10名で研究・準備を進めてきました。しかし、新型肺炎(SARS)の蔓延を防止するため、チベットは入域が全面的に禁止されてしまい、受け入れ先の中国登山協会から正式に許可取り消しの通知がありました。

隊員は5月上旬の白山合宿において、最悪の場合希望者だけでパキスタンのパサー峰に転進しようと決め、意外や9名もの賛同者を得ました。

7月5日の家族会、さらにはその後の壮行会で

多くの方々の激励を受け、7月18日と20日に分かれて日本を出発しました。彼の地に於いては、準備、アプローチも順調に進み、予定より2日早く登山活動を開始することが出来ました。

C1までの氷河の悪さ、降雪、深雪のラッセル等々の障害を乗り越え、登山期間ぎりぎりの8月18日、登攀隊員7名全員がパサー東峰(7,295m)に登頂しました。しかし、その喜びも束の間、C1への下降中、終始トップで活躍していた高橋敏雄隊員がクレバスに墜落してしまいました。残る6名の隊員の30時間にも亘る救助活動の末、一旦は救出したものの力尽き、悲しい結果となってしまいました。

ここに登山と事故の概要を報告し、有為な「本物の登山家」高橋敏雄隊員の冥福を祈るとともに、今回の遭難事故でご迷惑をおかけしました高橋家の皆様はじめ関係の皆様へ深くお詫び申し上げる次第です。
(記：酒井 國光)

登山隊の概要

1. 目標の山

パキスタン回教共和国西部 バトゥラ山城
 パスー主峰 (7,478m)

2. 登山期間

2003年7月20日～8月25日 (37日間)

3. 登山の目的

- 1) パスー主峰及び周辺峰の登頂
- 2) テイクイン・テイクアウトの実践
- 3) 日・パ友好登山交流

4. 登山結果

- 1) 8月18日、登攀隊員7名全員がパスー東峰 (7,295m) に登頂した。しかし、C1への下降中隊員1名がクレバスに転落、死亡した。遺体は収容隊がイスラマバードに降ろし、茶毘にした。
- 2) 隊として持ち込んだ物は回収し下ろして処分した。また、散乱していた他隊のゴミも可能な限り処分した。
- 3) 遭難事故があったために、パキスタンのハイポーターに多大の援助を頂いた。

▼パスー・インにて憩う隊員



5. 隊の構成

隊長	酒井 國光 (64)	茨 城	総括
副隊長	佐藤 英樹 (55)	北海道	
登攀隊長	岩崎 洋 (43)	愛 媛	装備
隊 員	北條 治男 (53)	東 京	
	〃 桶川和気夫 (53)	石 川	記録
	〃 石川 龍彦 (51)	奈 良	食料
	〃 加藤 和美 (50)	愛 知	環境
	〃 高橋 敏雄 (44)	宮 城	通信
	〃 吉武 裕志 (27)	神奈川	庶務
	リエゾン	シャヒード (34)	
	コック	アシュラフ (30)	
	キッチン・ボーイ	ワズィール (27)	

図1・パキスタン北部概念図



行動日誌

ア プ ロ ー チ

7月18日 先発隊日本出発

先発隊の佐藤、岩崎、桶川、高橋は森山、宮崎さんの見送りを受け予定より2時間遅れの16時10分にPK-853便にて成田を出発する。イスラマバード着は現地時間の22時30分。時差はマイナス4時間。日・パトラベルの出迎えを受けて市内へ向かう。ミニバスでは富山のスパンティーク隊と同席する。

日・パトラベルで大住さん、キンヤン・キッシュ隊の飛田、田村、寺沢さん達と乾杯する。ミーティングで、アナカンの出庫と食料の買出し済みを確認、隣接するラマダ・イン・ゲストハウスで宿泊する。

7月19日 入山準備

外国人登録、飲酒許可証の取得をする。コックのアシュラフ（30才）とリエゾン・オフィサーのシャヒード（34才）と会う。

7月20日 本隊日本出発

午前中は梱包作業、午後は昼寝をする。昼は35℃位、昼寝は日課となる。夜に雷雨。岩崎は本隊を迎えにラホールへ。

本隊の酒井、北條、石川、加藤、吉武はTGにてブーケット、バンコック経由でラホールへ。

7月21日 隊員全員集合

早朝4時30分、ラホール経由のTG便で来た本隊と合流して軽く乾杯し、再就寝する。午前中は本隊の外国人登録、午後は再梱包作業をする。夜は合流パーティー。

7月22日 ギルギットへ

早朝3時、隊荷22個と食料13個をチェックして大型バスに積み込み、4時30分に出発する。カラコルム・ハイウェイを一路北上してギルギットのジャマール・ホテル到着は23時50分。遅い夕食を取り、就寝は2時。

7月23日 パスー村へ

朝の内に野菜の買出しを済ませて、10時に出発する。出発して間もなく「奥地に電気を要求」する為の道路封鎖集會に遭い、12時まで待機させら

▼カラコルム・ハイウェイから見たパスー氷河



れる。途中、フンザ（カリマバード）でデポ品をピックアップして、パスー村到着は18時30分。イスラマバードからここまでの距離は約750km。ホテルはパスー・イン、梱包品をチェックして、夕食を済ませ、22時に就寝する。標高は2,450m。

7月24日 キャラバン1日目

トラクターとジープに荷物を積み込み、キャラバン開始地点のシャルマールに向かう。10分ほど戻った場所である。ポーター達と交渉して9時にキャラバンを開始する。隊荷は25kgが44個、ポーターは39人。余分の5個は1人2個分担いだりダブルボッカで運ぶ。

パスー氷河に沿って造られた崖上の水路を辿るように登る。ラベンダー、バラ、キクなどの原種が咲いている。トカゲがいる。パスーガーと呼ぶ綺麗な沢地でキャンプを張る。無人小屋が一軒ある。標高は3,200m。

7月25日 キャラバン2日目

氷河を横断し、ラズダールと呼ぶ放牧地でランチを取る。蝶や蜂が多い。急坂を登り、パトゥン



▲パスー氷河を横切る

登山活動

【ステージ (1)】

7月28日(晴) ルート工作

A隊 C1の途中までルート工作をする。

(デポ地 (1) 標高 4,300m)

〈BC (5時) → C1途中 → BC (19時)〉

B隊 レスト、洗濯、個人装備整理。

7月29日(晴) 荷上げ

A隊の高橋、B隊の佐藤、桶川、石川はデポ地 (1) まで荷上げをする。

岩崎、北條、加藤、吉武はレスト。

リエゾンは生活不適地とばかりに、キッチンボーイを連れてパスー村に降りる。

〈BC (5時30分) → デポ地 (1) → BC (12時30分)〉

7月30日(曇りのち晴) ルート工作

A隊及びB隊の桶川、石川はデポ地 (2) 標高 4,800mまで荷上げをする。

B隊の佐藤、吉武は途中まで氷河を試登する。この日に石川が足の腱を痛め、北條がサポートの為にB隊に移る。

日の出 5時30分、日の入り 18時30分。

〈BC (5時30分) → デポ地 (2) → BC (20時)〉

ダスと呼ぶピークでキャンプを張る。カルカ (放牧小屋) が数軒ある。標高は4,000m。ラホールから来ていると言う2人組のパキスタン人トレッカーの訪問を受けた。ここはトレッキング・ルートになっているようだ。

7月26日 キャラバン 3日目(BCへ)

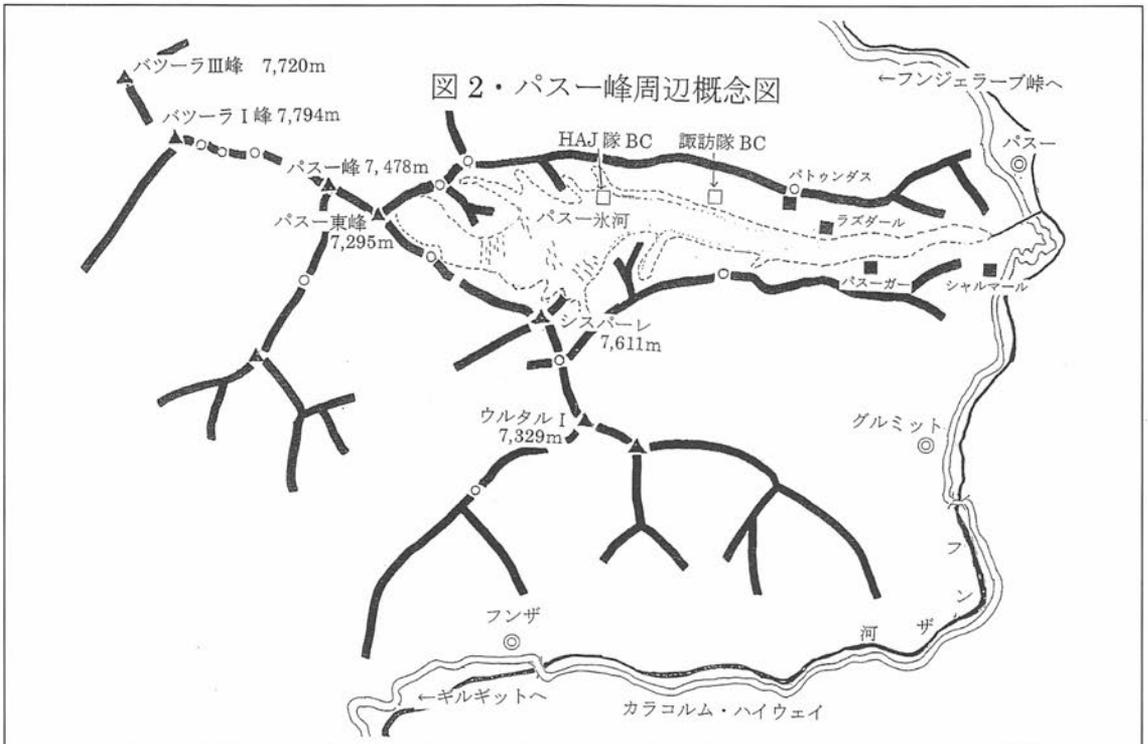
82年の諏訪山岳会隊のBCでは遠すぎるとの判断で、更に上部に適地を求めるべく6時に北條と高橋を先発偵察に出す。パトゥングスから一旦急下降して諏訪隊BCへ。さらにアブレーション・バレーを廻り、末端から氷河へ上がった所に適地があった。渋るポーターを宥めて、漸く荷上げを終了する。整地 (整氷?) をしてBC建設をする。14時30分。標高は4,050m。

7月27日(雨のち曇り) 登山準備

BC開きをする。追加のテント張り、隊荷の整理をする。フィックスロープの切断、竹竿の赤布付け、スノーバーのシュリング付け等の作業をする。隊長の酒井は歯痛が酷くて前線を離脱、後方指揮に専念する。岩崎は風邪で不調。A、B隊を結成する。

A隊：岩崎 (L)、北條、加藤、高橋

B隊：佐藤 (L)、桶川、石川、吉武



▼BCにて(左からワズィール、アシュラフ、シャヒード)



7月31日(曇りのち晴)

全員レスト。

8月1日(晴) C1地点確定

A隊はC1(4,900m)の位置を確定する。

B隊はデポ地(2)まで荷上げをする。ステージ(1)の終了。

ワズィールがBCに戻ってきた。

〈BC(5時)→C1予定地→BC(19時)〉

8月2日(晴)

全員レスト。

8月3日(晴)

全員レスト。テントの張り直しをする。

石川、吉武、(酒井)は石川の足の調子を診るために諏訪隊BCを往復する。

8月4日(雨)

雨天停滞。

8月5日(雨のち曇り)

雨天停滞。

【ステージ(2)】

8月6日(曇り) C1建設

A隊は50mロープで高橋、加藤、岩崎。

B隊は25mロープで北條、石川。25mロープで佐藤、桶川という構成になる。

A隊及びB隊はC1までの荷上げと建設、宿泊をする。C1は第一プラトー上で、標高は4,900m。

〈BC(7時)→C1(18時)〉

8月7日(C1. 雪) 荷上げ

A隊、B隊はデポ地(3)標高5,200mまで荷上げをする。C1より上部は日本の冬山の2~3月の状態と同じで輪かんじきが必須。

〈C1(5時30分)→デポ地(3)→C1(15時30分)〉

8月8日(C1. 雪のち曇り) C2へのルート工作
降雪の為、出発を少し遅らせる。A隊はデポ地(3)より先頭空身で仮C2予定地の少し上部まで偵察。

B隊はダブルボッカと仮C2(標高5,350m)建設をする。

A・B隊とも仮C2宿泊。

〈C1(7時)→仮C2上部→仮C2(16時30分)〉

8月9日(仮C2. 雪) 停滞

夜半からの積雪(20cm)、更に降雪中。斜面の雪崩を警戒して停滞。降雪30cm。

8月10日(仮C2. 雪) C3へのルート工作

A隊は先頭空身で標高5,500m地点まで偵察。

B隊はダブルボッカとデポ地(4)標高5,450mまで荷上げをする。

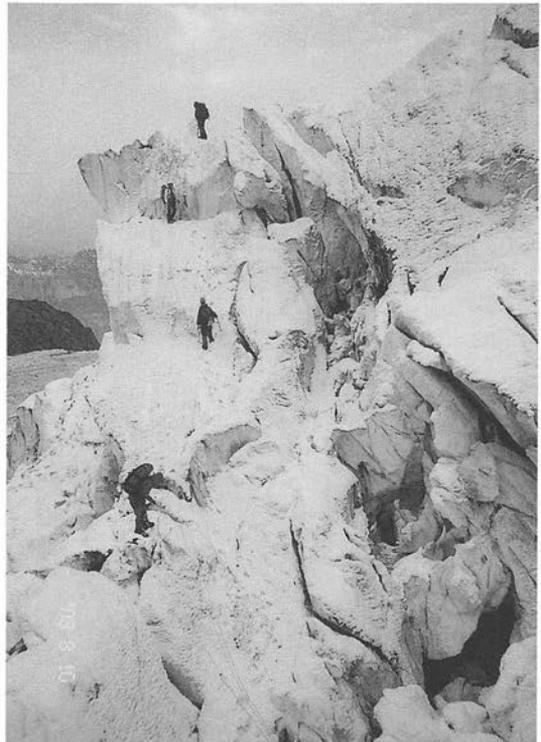
8時30分、ホワイトアウトになりBCへ下る。この時点でC2建設はされていないがステージ(2)の終了とする。

帰路、桶川が氷河下部のクレバスに嵌まるが、救助される。

〈仮C2(5時30分)→仮C2上部→BC(20時)〉

8月11日(曇りのち雪)

全員レスト。



▲BC~C1間のクレバス地帯

8月12日(晴のち曇り)

全員レスト。

8月13日(雨のち曇り)

雨天停滞。

【ステージ (3)】

8月14日(曇り) C1へ

A・B隊同一行動とする。

ステージ (3) は5泊6日の予定だが、食料が少し心配だ。

C1直下の「谷」と呼ぶ崩壊地が著しく崩れていて迂回ルートに工作に手間取る。C1泊。

〈BC (5時30分) →C1 (15時)〉

8月15日(C1. 雪のち曇り) C2建設

輪かんじきで出発する。以前のトレースが消えていて再びラッセルをする。A隊は先頭空身でB隊はダブルボッカをする。日が出ると暑く、陰ると寒い。極端である。

16時にC2を確定し、17時にC2建設をする。C2泊。標高5,600m。

〈C1 (5時30分) →C2 (17時)〉

8月16日(C2. 雪のち晴) C3建設

輪かんじきで出発する。ラッセルは膝上。

A隊は先頭空身でB隊はダブルボッカをする。第三、第四プラトール間のセラック帯にC3を建設する。標高は6,000m。

高橋、岩崎は上部を偵察する。

〈C2 (5時30分) →C3 (17時)〉

8月17日(雪のち晴) 頂上アタック・失敗

ガスの中を出発する。第四プラトールに出るとガスの切れ間にパスー東峰が見え隠れする。10時30分、標高6,600m地点。

頂上プラトールに出た所でホワイトアウト。13時まで待機するが回復せず。ビバークも考慮するが結局、安全第一でC3へ戻る。

〈C3 (5時) →頂上プラトール→C3 (16時30分)〉

8月18日(晴) パスー東峰登頂

最後の予備日1日を使って再アタックをする。天気良し。9時に頂上プラトールに出て、初めてパスー主峰を見る。

さて、悪天で3日間を浪費した為に両峰を登る余裕はない。近くて急な東峰、遠くて緩い主峰は登れば日本人初。北條と桶川が主峰を選び、佐藤、石川、加藤、高橋が東峰を希望する。多数決で東峰を登る。この選択は正しかった。近くに見えた

図3・BC～C1間ルート図



▼頂上アタックの日



東峰は案外遠くて「肩」に着いたのは14時、地吹雪の急斜面を登りピークに出たのは17時20分。帰りは既に暗くC3に辿り着けない。20時、ビバークを決める。雪面に穴を掘って入りツェルトを被る。手足が冷たい。標高は6,700m。

〈C3（4時）→パスー東峰ピーク→ビバーク（20時）〉

8月19日（C3. 曇りのち雪） C3に戻る

C3へ帰る。今日はC1まで行く予定だが、昨日からの疲労を考えてC3泊とする。

〈ビバーク地点（6時30分）→C3（10時30分）〉

8月20日（雪） 事故発生

夜半からの積雪30cm。高橋が2つのテントの周りを除雪している。

5時発の予定だったが出発が2時間遅れる。降雪とガスだが、予備日を使い切ってしまったので降りるしかない。C2へのルートをショートカットして下降中12時40分、先頭の高橋がクレバスに落ちる。セカンドの加藤も引き摺られるが止まる。

岩崎、加藤がクレバスに降りて救出活動をする。しかし、落ちた拍子にクレバスの狭部に楔を打ち

込んだように高橋の右足が太腿以下を挟まれて抜けない。一生懸命にカッティング作業をする。防寒着、ビスケット、マット、湯などを高橋に届ける。

夜中の0時過ぎ、降りた2人が上がり、佐藤が降りる。疲れた二人は臨時に設営したテントから足を出して休んでいる。佐藤は夜通し、高橋と話していたようだ。

北條、桶川、石川は佐藤からの指示を待ち、クレバスの縁でザックに腰掛けてツェルトを被りビバークをする。佐藤は何度か合図を送ったと言うが、待機の三人は気付かなかった。標高は5,500m。

〈C3（7時）→ビバーク〉

8月21日（雪） 救出・死亡

夜半からの積雪30cm。更に降雪とガス。朝になって佐藤を呼ぶが返事がない。何度も呼ぶと力のない返事が帰ってきた。慌てて引き上げる。佐藤は、高橋の遺言を聞いていたそうである。涙ぐみながら叫んだ。「俺に何をしたいって！何も出来やしない…」

岩崎、加藤が再びクレバスに降りる。17時過ぎ

▼こんなクレバス内で救助活動を行った



に漸く、高橋の足が外れる。引き上げている間、歌を歌っているかのように何か喋っていたが、そのうち静かになった。クレバスの縁に引っ掛けて手間取り18時、30時間ぶりに救出する。しかし、意識はなく呼吸も弱々しい。心臓マッサージと人工呼吸を施すが、テントへ運ぶ準備をしているうちにスッと息を引き取った。「タカハシ、タカハシ」と耳元で呼ぶが反応はない。18時08分、皆に会うのを確認したような死だった。

Aテントに桶川が移動する。A・Bテントに各3人となる。

8月22日(晴) C1へ戻る

高橋をテント跡に仮埋葬してストックを目印に2本立てる。

全員疲れているが、2日間に渡って救出作業を続けた岩崎、加藤がより激しいようだ。予定より2時間も遅れて出発し、C1へと向かう。下りはB隊が先導する。クレバスのスノーブリッジで桶川が落ちるが這い上がる。日が落ちてからはルートが分からず苦勞するが、佐藤の強力なルートファインディングによって漸くC1に辿り着く。食べ物は殆ど喉を通らず、ひたすら水と茶をガブ飲みする。

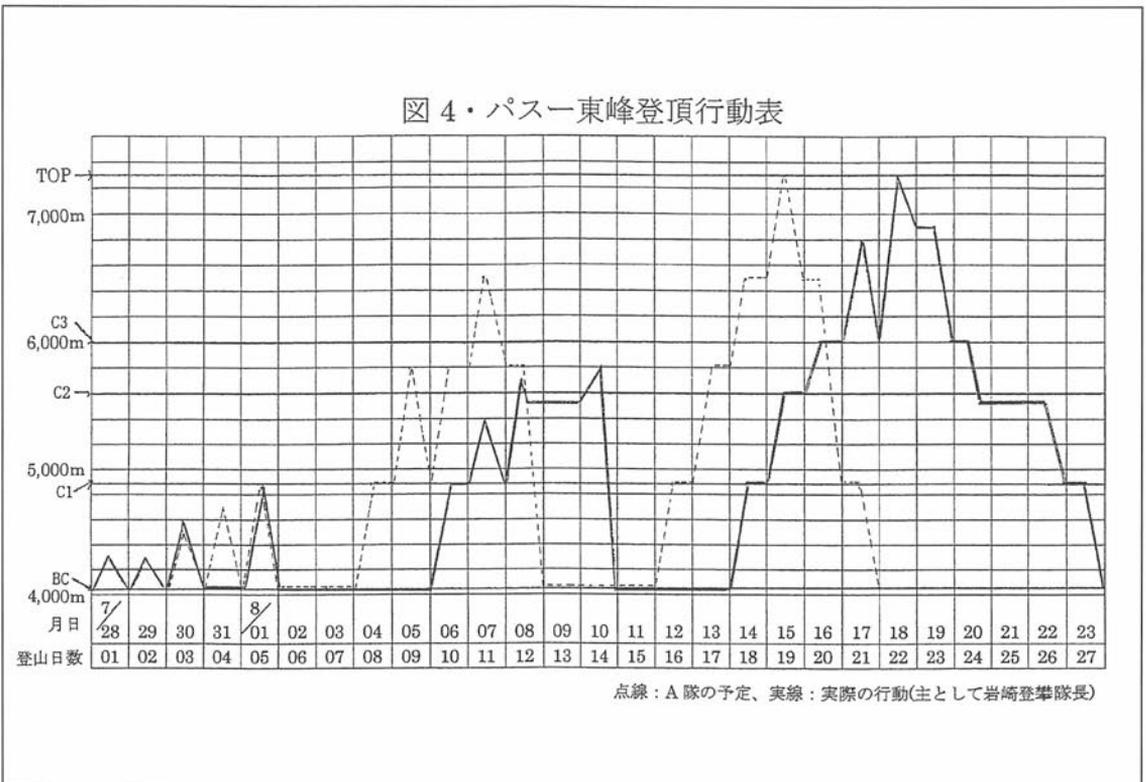
〈ビバーク地点(9時)→C1(20時30分)〉

BCの酒井は事故連絡の為に下降。リエゾンと合流後グルミット村へ向かう。

夜中カラコルム・ハイウェイ沿いの土産物屋で電話を借り、日・パトラベルの大住さんに事故の一報を入れ、日本への連絡を依頼する。

〈BC(6時40分)→グルミット(22時50分)〉

図4・パサー東峰登頂行動表



▼クレバス帯が新雪に覆われた



8月23日(晴) BCへ戻る

全員疲れていて、またまた出発が予定より大幅に遅れる。B隊が先導する。行動食は無し。C1直下の「谷」の崩壊は酷く、新たなルートを求める。クレバスは大きく開き、ザラメ雪に乗った新雪は滑りやすい。

日が落ちてからは、例によって佐藤の力を借りて、夜遅くBCに着く。BCではライトを点けて迎えてくれた。全員、バテバテのヨレヨレの帰着である。

高橋の追悼に、献杯をする。糖分不足の為か、多くの者がキャンディ、ジャム、蜂蜜、砂糖などを舐めている。夕食はビール、日本酒、ウイスキーに各種つまみ。味噌汁にパキスタン・チキンカレー、ジャパニーズ野菜カレー、カスタードプリン。更にミルクティー、グリーンティーなど急激な変化に胃がビックリする。

〈C1 (11時) →BC (22時40分)〉

酒井は、警察に行き事情を説明、その電話にて留守本部山森理事長に事故報告をする。

その後、ジープをチャーターしギルギットへ。高橋夫人に事故報告をする。

登山終了後

8月24日 下山準備

全員レスト。ポーター手配の為、コックのアシュラフが下に降りる。

17時30分、日・パトラベルより派遣されたハイポーター2人がBCへ到着。

ギルギットの酒井は、空路でイスラマバードへ戻る予定であったが、積み残しをされてしまった。

8月25日 パトゥングスへ

パッキング作業をする。

15時、明朝出発予定の19人のポーター達が1日早く来る。協議の結果、本日発に変更する。急遽BCを撤収して17時に出発する。パトゥングス着は19時30分、カルカ(放牧小屋)泊。焚火が暖かい。

ギルギットの酒井は、空路イスラマバードへ戻る。

8月26日 パスー村へ戻る

パトゥングス発8時、ラズダエル、パスーガールを経由してカラコルム・ハイウェイ沿いの地シャルマールに戻ったのは14時である。ポーター達の支払いを済ませて16時、ホテル・パスー・インに帰る。ボリスからの事故に関する事情聴取があり、その後スタッフを含めて「ご苦労さん会」の夕食を取る。

8月27日 イスラマバードへ

6時、パスー発。中型バスにて南下する。チラスで昼食(13時30分~14時30分)。ベシヤムで夕食(20時~20時30分)。イスラマバードに着いたのは翌日の早朝3時、21時間のバス旅である。酒



▲登山を終わってBCにて

井、大住、督永さん達の出迎えを受ける。早朝のイスラマバードは涼しい。前回同様、日・パトラベルに隣接するラマダ・イン・ゲストハウスに宿泊する。

8月28日 帰国の旅に

出国許可証に相当するトラベル・パーミットを取得する。

佐藤、桶川は22時35分イスラマバード発のPK-852便にて帰国。

北條、加藤、石川、吉武は23時50分ラホール発のTG便にて帰国する。

酒井、岩崎は高橋夫人、志小田、野沢井専務理事を迎える為にラホールへ行く。

8月29日 成田へ帰る

PK-852便、成田着13時（日本時間）佐藤、桶川は山森、酒井（奥さん）の出迎えを受ける。空港にて山森理事長に事故報告をする。

TG便の北條、加藤、石川、吉武もその日に山森、酒井（奥さん）の出迎えを受けて帰国した。空港にて同様に報告をする。

（記：桶川、追記：酒井、岩崎）

その後の報告

8月28日

北條たち帰国組4名を見送った我々は、3時間程待ち、高橋夫人久美子さん、志小田美弘（HAJ評議員）、野沢井歩HAJ専務理事を空港で迎えた。夜中の11時過ぎでもあり、遠来の客の疲労も考慮しラホール泊まりとする。

8月29日

イスラマバードに戻り、高橋夫人に事故報告をする。「於：日パ・トラベル、出席者：高橋夫人、志小田、野沢井、大住（日パ・トラベル、HAJ評議員）、酒井、岩崎」

その後、収容隊が上部へ行くための準備を行う。夜、HAJより派遣された寺沢玲子会員到着。

8月30日

収容隊岩崎、寺沢、HAP陸路出発。昼前になり大住さんが、明日23時50分発のフライトが4席確保できると言う。久美子夫人にも相談し、一旦帰国することに決定する。

午後、ラウルピンディーのバザールの見学など

をして過ごす。

8月31日

午前中買い物などをし、2時過ぎラホールへ向かう。フライトは夜中の11時50分。バンコックでのトランジットが5時間もあったが、9月1日、午後7時30分成田着。山森理事長他の出迎えを受け無事帰国した。（記：酒井國光）

登頂記

午前3時に出発の予定であったが、少し遅れて4時にヘッドランプを着けてC3を出る。いよいよアタックが始まる。いろんな都合で一次、二次隊に分ける余裕はなく7人全員が一緒に行動するので頂上までの高度差は千メートル以上ある。はたしてこれで頂上に到達できるのだろうかという疑問が頭の隅にあったが、事ここにいたっては全力を尽くすのみ。それでダメならしょうがないと半ば開き直ったような気持ちになってきた。

又悪天候で3日間を消費し昨日はアタックを失敗しているのもう予備日はない。こういう所が後ろの予定が決まっている遠征の悪い所だと誰かが言っていたが、それには同感。

最後のアタック日。とにかく悔いのないようにやるだけだと決意する。まあこういうのを背水の陣というのだろうか。少し大ききかな？

幸い天候は良いようだ。C3から適度な傾斜の雪壁を快調に登っていく。順調に昨日のトレースを追っていく。やはり、トレースがあるのと無いのとでは大違いである。しかし寒い。岩崎さんが言うには「カラコルムの夏は暑い。ヤッケはゴアの雨具で充分。」この言葉は昼間、あるいは下部では通用するがここでは違う。冬用のヤッケが欲しいところだが、無いものはしょうがない。手足が冷たいが気合いを入れて登る。やがて傾斜がゆるくなって太陽の光があたるようになると、第4プラトーである。太陽の光がこんなにもありがたいと思ったのは久しぶりである。しかし紫外線が強い。数日前から私は何となく目がおかしかった。コリコリするのである。雪盲の初期段階だろうと思ひサングラスの上にさらにクリップオン式のサングラスをかけたがこれが正解。まぶしくなくなっ

▼頂上にて（左から岩崎、北條、石川、加藤）



た。いかに紫外線が強いかを実感する。

さてこの第4プラトーからは東峰は見えるが、未だ主峰は見えない。甲子園球場がいくつも入るような広大な雪原を黙々と進む。七千メートル峰の大きさを実感する。昨日のトレースは所々消えているがあれば助かる。そして昨日の最高到達点を越えて、九時過ぎに頂上プラトーへ到着。ここで初めて主峰を見ることができる。それは円錐型をした優美な形をしていたが、ラッセルは大変だろうなというのが私の第一印象であった。

ここでわれわれは重大な決断を迫られた。すなわち東峰に登るか、主峰に登るかということである。ここから見ると東峰も主峰も近いように見えるが、見た目以上に時間はかかると思ったので私は迷わず、東峰を選ぶ。協議の結果も東峰と決まった。その時の岩崎さんの言葉「隊の事を考えれば東峰だけど自分としては主峰に行きたい。」はよく理解できた。さてルートだが左から直線に行きそうに見えたが、クレバスがありそうなので右から雪原を行き最後にやや急な雪壁を越えるルートを選択。結果的には東峰を選んだことは正しかったと思う。空気が澄んでいるためか近くに見えたピークは意外に遠く、又膝までのラッセルに苦しめられて、頂上の肩に着いたのは14時であった。それにしても高橋さんの奮闘には感謝、感謝。ルート工作でもラッセルでも常に先頭にたってやってくれる姿には頭が下がった。余談だがC1から上

は全員がワカンを着用していた。初めはヒマラヤでワカン？と懐疑的だったが実際に使ってみてその威力に改めて感心した。他の隊がまったくいないこの山ではもしワカンがなかったらと思うとゾッとした。

この肩からはもう近いだろうとザックをデポして地吹雪の中の急斜面を登るが、これが又大間違い。一時間もあれば登れると思ったのに頂上に着いたのは17時20分であった。人間何回もだまされると目の前の事実が信じられなくなるが、最初こも又頂上じゃなくてさらに上があるだろうと思ったら向こう側が見えてまさにパス—東峰の頂であった。ピークは切り立っていて数人が立っている程度の狭い所だった。感激もそこそこに下降に移るが、吹雪の中寒い、痛い、見えないの三重苦であった。そして頂上プラトーの6,700メートル地点で時間切れビバークとなる。雪面に穴を掘り、ツェルトをかぶる。長く苦しい夜だったが個人的には吹雪の厳冬の槍、穂高の稜線でのビバークのほうがきつかったなと思った。

翌日は昨日とうって変わって良い天気になった。6時30分頃ビバーク地を出て10時30分頃C3に到着。今回の遠征はルートも難しく、天気も悪かったがそれだけに頂上に立った時の感激は何事にも変えがたいものだった。しかしその後には起った事を考えると、いまだに信じがたく、残念な気持ちでいっぱいである。 (記：加藤和美)

収容隊報告まで

日本出発まで

8月23日

午前2時57分、イスラマバードの日パ・トラベル大住恵子氏から事故の第一報が入る。すぐに山森欣一理事長宅に電話を入れ内容を伝える。

8月26日

山森より現地行きの要請があり承諾する。

8月27日

ビザを発給していただく。

8月28日

大住からスノーボードを持参して欲しいとの連絡を受ける。東京都山岳連盟救助隊の金子秀一氏に相談すると、ストレッチャー（レスキューボートの一種）を自宅まで運んで来て下さる。

ベースキャンプまで

8月29日

山森、酒井夫人に見送られ、PK853便にてイスラマバードへ。

収容隊用の共同装備は、既に野沢井歩専務理事により手際良く準備されていた。

8月30日（曇り後雨後晴）

朝一番のフライトでギルギットに向かうことになり、トゥラヤ（＝スウラヤ・衛星電話）の取り扱い説明書を片手に一睡もせず朝を向かえる。試しに日本の山森宅にかけ、出発の報告をする。

フライトは無残にもキャンセルされ、急遽陸路を採ることになる。オフィスに戻り準備をし直し、岩崎、ガイド、コック、高所ポーター（以下HAP）2名の6名で出発する。食事時以外は、皆流石に疲れから車中は眠りっ放し。チラス泊。

8月31日（晴）

ギルギットで買出しし、HAP2名が合流。パス・イン泊。

手違いで、急遽パスでHAP探しとなったが、幸いにも強者3名を探し出すことが出来、計7名のHAPを確保する。

9月1日（晴）

キャラバン開始地点のシャルマルへ行くも、

▼すでにストックの先しか出ていなかった



予定の時刻になってもポーターが来ず、車で迎えに行く。ジープ事故が原因。

岩崎、寺沢、HAP2名が先行し、パス・ガーで昼食後、1時間かけてパス・氷河を横断する。宿泊地ラズダールは水は氷河から汲むが、気持ちの良いキャンプサイトである。

9月2日（快晴）

森林混じりの急登でパトゥングスの稜線に出、気持ちの良い草原を歩きベースキャンプ（以下BC）着。諏訪隊のBCを収容隊のBCとする。

午後氷河内に遺体安置の場所を作り、その後ストレッチャーの使用説明をする。

収容作業

9月3日（快晴後曇り）

3時15分、真っ暗闇の中を次々と出発する。途中からの交信では、クレバス帯が変化しかなり悪くなっているようだ。14時35分C1着。

HAJ事務所、大住にC1入りを報告する。

9月4日（雨一時曇り）

BCでは雨、それめかなり強く降る。C1では降雪のため早朝から出発を見合わせる。

交信が不良だったが、10時40分遺体掘り出し中、11時35分遺体梱包終了の報が入りほっとする。HAJ山森、日パ大住と連絡し合い、今後の予定などを話し合う。

16時前、C1へ戻る。

9月5日（雨後雪後曇り）

昨夜からの雨が曇から雪になる。

5時前の交信で、「C1は30～40cm積もった。登山中はずっとこんなだったから、それほど問題はないだろう」とのこと。6時過ぎに下降し始める。

途中ラッセルがひどく、クレバスが大きく開いていたりしてかなり難渋している様子だ。H A J 隊BCまでタンカ、食料などを上げる。17時全員H A J 隊BC着。遺体は氷河に安置する。

9月6日（雪後雨後曇り）

岩崎に休養してもらい、H A P と収容に向かう。さすがにH A P も疲れた様子で、20歩進んでは休憩してしまう。しかし、途中で夏の名残りの花々を摘み、ストレッチャーの上に供えてBCに到着した。

前以て作ってあった場所に安置し、日本から持参した線香と酒を供える。

9月7日（曇り後晴）

ポーターは12時頃から集まって、遅い出発となり、ラズダール泊まり。

岩崎とのんびり下降していくと、先行したH A P やポーター達が氷河内に安置場所を作ってくれていた。確認に行くと、老ポーターが頭部側に花を供えていてくれた。

9月8日（曇り）

H A P 等が先行し、我々はゴミの処理などをしてから出発する。11時シャルマル着。

ギルギットで氷を探すも季節外れで入手できな

い。にわか雨も降り出し、カラコルム・ハイウェイの崩壊に気を揉みながら、9日6時にイスラマバードに到着した。心配した氷は最後のひとかけらがまだ残っており、まるで眠っているかのように穏やかな表情だった。

その後

9月10日夜から翌11日にかけて、関係者立会いの下ラワルピンディーのヒンドゥー教寺院で荼毘に伏し、遺灰は同日アトックで雄大なインダス河に流され、遺骨は9月15日故郷仙台に還る事ができた。

（記：寺沢玲子、酒井が約20分の1に要約した）

収容隊メンバー

岩崎 洋、寺沢 玲子

ガイド：サディク、コック：イブラヒム

キッチンボーイ：ワズィール

HAP：アリ・ムサ／シャヒーン・ベイグ／

ゴラム・フセイン／

ムハマド・フセイン通称チョタ・フセイン／

アクラム・アリ／アジズ・ベイグ／

ワハープ・アリ・シャー

その他：現地ポーター多数



▲C1～BC間のクレバス帯は難渋をきわめた

収 容

9月3日 快晴後曇り

午前3時過ぎ漆黒の闇に向かって歩き出す。私の心は少々重かった。少しでも早く高橋隊員を日本へ家族のもとへ帰したい。さらに6名のHAP(高所ポーター)も事故無く下山させなければならない。二次遭難だけは避けなければ……。胃が痛いのは酒のせいばかりではなかった。

凍傷の足にモレーンのガラ場は少々きつくて遅れぎみだったが、氷河に入ってからなんとか普通に歩いて行けるようになった。登山中に比べて大きく開いたクレバスをハンゴを使ったりあちこち迂回したりして通過し、危惧していた上部セラックも1ピッチ張り直ただけで済んだ。

14時35分、C1到着。

9月4日 雪、霧

夜半より雪が降り始め吹き降ろしが激しい。今迄のパターンだと明るくなる頃に回復する事が多かったのではばらく様子を見る事にした。

5時頃風が弱まって来たので出発を決め、5時30分ほとんどホワイトアウトの中記憶を頼りに出発する。途中4本赤旗が残っていた。BCとの交信で天気を確認しながらのラッセルである。中央部のクレバス帯迄はなんとか来る事が出来たが、クレバス帯通過後、上部のクレバス帯までのルートが分からず苦勞する。ヒドンクレバスに注意しながらのラッセルで非常に神経を使う。天気は雪、視程は150~200m位、上も下も真白い世界である。クレバス帯は体重の軽い私が止めるより止めてもらう方が少しは安全そうなのでトップをひいた。ルートについても言葉だけでは雪のなかうまくは伝わらない。

新雪の積もったスノーブリッジを何本か渡りながら帰りの事を考えるが、全員が渡り終える前にブリッジが落ちてしまったらなどと思うと冷や汗ものである。雪はますます激しくなり霧は少し引いてきたようだが視界は悪い。

10時30分頃事故現場に着いた。クレバスは広がっているはずなのに雪でほとんど隠れているため悪夢のような30時間を思い出し胃が痛くなる程神経を張りつめての通過だった。

目印のストックは20cm位しか出ておらず、1日遅れたらまたここで時間を食ってしまう所だった。

1時間程で遺体を収容。すぐに下降を始める。念のためクレバスの手前で待たせておいた3人にコールをかけ両側からの確保でクレバスを渡しながら下って行くがトレースは雪と風に消し去られまた始めからやりなおしである。

上部クレバス帯より下はスピードアップの為チョタ・フセインが先行しトレースをつけて行く。C1のプラトー迄は勘を頼りに下ってこれたが、そこからはまったくのホワイトアウトで時折ガスの切れ間に見える地形と言うか影を見ながらの行動となった。

15時30分、C1到着。キャンプの近くに遺体を仮安置した。終夜雪。

9月5日 雪→曇り→雨

昨夜の積雪は30~40cm。4時15分BCと交信して天気を確認する。雲の中にいるのでBCからの情報はとてもありがたい。これからイスラマ帰着迄の打ち合わせをして6時頃出発。交信で下部の天気が回復にある事が分かっている。

出だしの懸垂下降3ピッチを多少時間がかかってうまく乗りきれば何とかなる。

ロープを2本張ってゆっくりゆっくりと降りして行くが、不安定な所で支点が今一悪く、上と下でコールをかけあいながら、ぶつけないよう、落とさないよう細心の注意をしながらの作業であった。

中間部分は雪が深くヒドンクレバスもいくつかあるので、私とゴラーム、チョタ・フセインの3人でラッセルしながら先行して行く。雪の状態が悪くスリップして滑落しそうな所ばかりなので気を使うが、下る程天気が良くなるのでそれだけを頼りに3人でラッセルを続けた。

下部クレバス帯に近づくにつれ積雪は少なくなって来て、やがてむき出しの氷河になる。そして最後の難関下部クレバス帯である。大きく開いたクレバスの向うにナイフブリッジの様な氷が次のクレバスを隔てている。登山時にデポしたハンゴを安定していそうな所にかけては渡り、ロープを張って遺体を渡して行く。クレバスを通過し氷稜をトラバースし何とかフィックスの終了点に着く事が

出来た。自分の安全を確保するのも大変な所でハイポーター達は実に良くやってくれたと思う。ありがとう。高橋隊員は9月4日BCに帰着した。

今回の収容に際しましては日パトラベルの督永様、大住様そしてスタッフの皆様にご多大のお世話になりました。おかげ様でイスラマバードからイスラマバードに帰るまで10日間という短い期間ですみやかに高橋隊員を連れて帰る事が出来ました。紙面をお借りして御礼申し上げます。(記：岩崎 洋)

おわりに 一隊長私記一

今年ほど私の登山人生で「参った」ことはない。高橋敏雄隊員の遭難死は勿論その最たるものだが、まずは個人的な事から。

海外登山17回目にして、BC入り前にリタイアしてしまった。出発前、歯痛に悩まされ応急処置を受けた。先生が言うには「高山では登りと下りでは、どちらが歯痛が激しいのか記録してきて下さい」と。「はい」とは言ったものの、そんな甘いものではない。現地山の麓に着いた時は、すでに顔面右半分は麻痺状態。食事はほとんど嚙まずに飲み込む。当然のこととして胃がやられる。BCで岩崎ドクターの投薬宜しきを得て、なんとか生き延びた始末だ。(帰国後、歯科医の説明では応急処置の箇所が化膿していたとのこと)

BC滞在3週間、ひたすら上部の登攀隊との無線交信に当たる。氷河の上のBCでは行動範囲は限られる。隊長テントとメステント間数回を往復するのみ。足腰は退化する。

高橋遭難の報を知らせに下山したが、これがまた苦難の行だった。ワズィールの友達の某が一緒に下り、氷河の横断からはその弟も同行する。(彼達は、その日我が隊の下山のために登ってきたポーターなのだ)このあたりから私の意識は乱れてきた。体のバランスが取れず、常に右後ろに傾く。件の弟がすかさず支えてくれる。今ここで行動しているのが現実なのか幻なのか判然としない。パスガーのカルカで一休みする。彼らは私の体調を考え、今日はここに泊まれと言う。「まだ4時だ。登山隊だって遅い時には8時まで行動している。何としても今日中に電話の通じるパスまで降りるんだ」と、日本語で喚く。

それから先が大変。大袈裟に言えば「死の行軍」簡単に言えば「夢遊病者のさ迷い」…。真っ暗くなって、途中合流したリエゾンと某に左右から支えられて「とある民家」に疲労困憊で辿り着いた。でも、そこから電話をした場所まではさらに2時間もかかった。

この日1日で、私の寿命は3年は短くなったことは間違いないが、まだ私は生きている。

それにしても、高橋敏雄隊員の遭難死は痛恨の極みだ。常に隊のトップに立って活躍していた彼だ。あんなに慎重な行動をしていた彼だ。「高橋がクレバスに落ちた。岩崎が降りて救出中」との第一報を受け取った時、咄嗟に「ヒドン・クレバスに落ちた」と、私は判断した。ミニヤ・コンカの事故報告で山森理事長が「口がいているクレバスに落ちる人はいない。ヒドン・クレバスが怖い。1人が落ちることはある。そのためにロープを結んでいるのである」と、書いている通りだ。今回の事故は、結果的に口のあいているクレバスに転落したのであるが、私はクレバスの一方の壁に発達した「雪庇の踏抜き」と考えている。吹雪の中、通い慣れた日本の山でも異常に発達した雪庇への対処は難しい。ましてや初めての海外の山ではあり得ないことではない。

そして現実には落ちたのだが、その時結んでいたロープはどのように機能したのか。こちらの方が今回の事故では解明しなければならない問題点であると考えます。

今回、私は「いしざかびんが」のCDをBCに持ち込み、隊員に聴いてもらった。そして「気に入ったらあげるよ」と、言った。当然高橋も「志小田の分と2つ欲しい」と、希望した。そのCDの中の曲の一部を引用して私記を閉じよう。

いつかある日 山で死んだら

古い山の友よ 伝えてくれ

母親には 安らかだったと

男らしく死んだと 父親には

伝えてくれ 愛しい妻に

俺が帰らなくても 生きていけと

娘たちに 俺の踏跡が

故郷の岩山に 残っていると……

「本物の登山家」高橋敏雄君安らかに眠れ。合掌

ロー・マンタンの空、遙かなり(16)

カリガンダキ左岸の地図の空白部に行く

高橋 照

5月8日の朝は小雪の訪れとともに始まった。もう4千メートルのラインを越えているので、ちょっと天気が悪いと雪になる高度まで上がって来たのである。

隊は私とコックのニマだけを、このナマのゴートに残して全員ウルベカック目指して荷上げを開始した。私達の隊貨はこのナマ・ゴートとタンゲ村の2カ所に集積されていた。タンゲ村にはまだTBSメンバーが残っており、ナマでの荷物監視は私とニマということになっているのである。しかし、今日はTBSスタッフと金子さん達はタンゲより荷上げされる最後の荷物と一緒に、このナマ・ゴートまで上って来る予定であった。

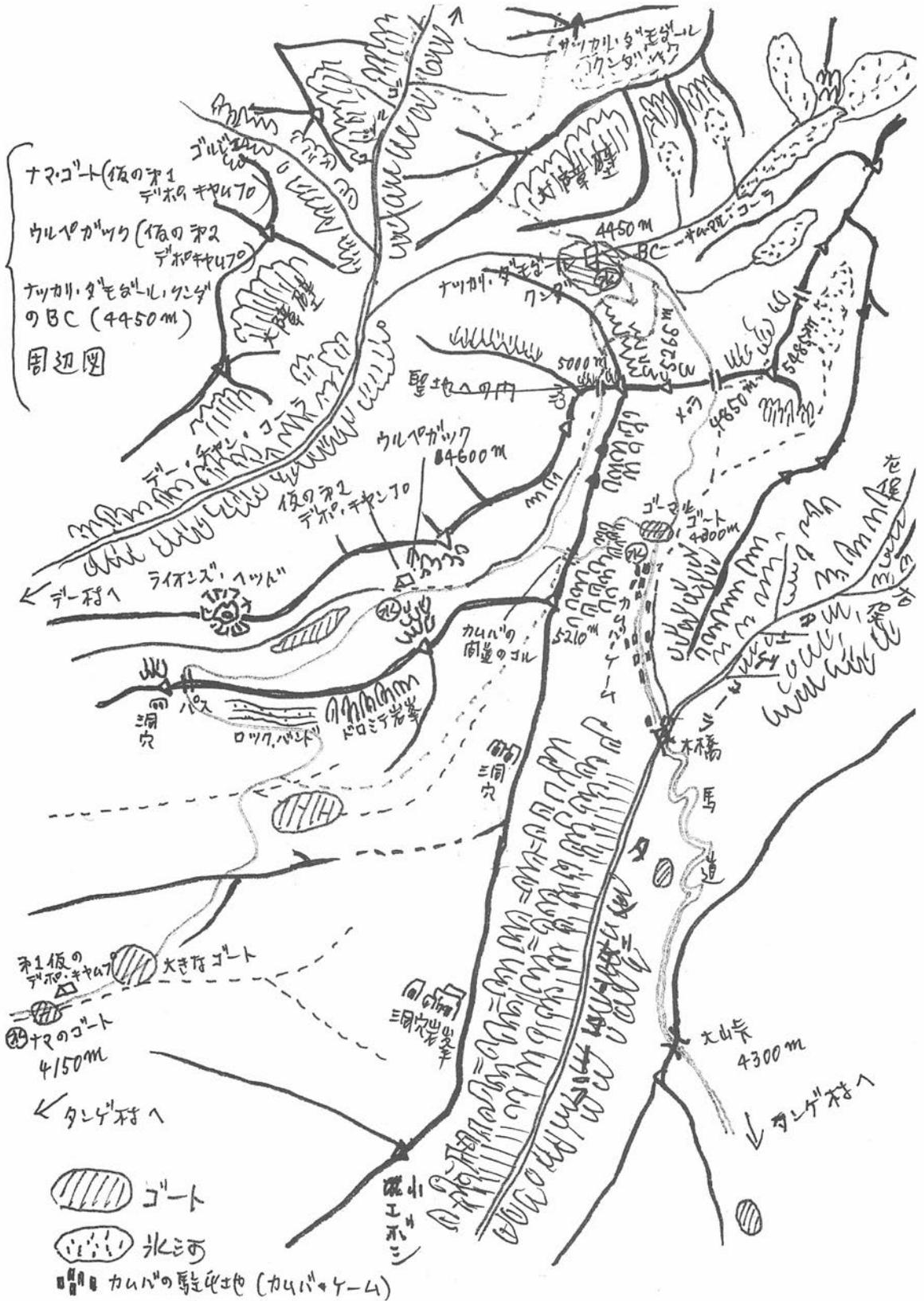
私達はボカラ・ポーターを全員タンゲ村で解雇しているので、タンゲより上部のトランスポートは、シェルパ・ポーターとタンゲ村より数人のボテを雇っているだけなので、キャンプよりキャンプまでの荷上げは、2日乃至3日の日数を要したのである。本日偵察隊はナマ・ゴートの遊牧民を一人ガイドとして連れて行った。偵察隊と荷上げのポーターが全員見えなくなったじぶん、天気も回復し、雪もやんで来た。前方に見えるムスタン・ヒマールは一段と白さを増したようだ。隣の遊牧民の子供達が、私の天幕の前の丘の上に座り込んで、ムスタン・ヒマールを眺めている。空間に子供達とムスタン・ヒマールが一つになって正に絵に画いたような風情である。私は何枚も何枚も写真を撮った。下の水場よりおびただしい数の山羊の群が、私の天幕の前を通り過ぎ、上の台地に向かって移動して行った。山羊達が通り過ぎると、また再び元の静寂に戻り、ムスタン高原より心持良い微風がそよそよと吹上げ、まことにのどかな平和な風景である。時々、あの不思議な香り、あ

のタンゲ・コーラの土手を上がる時、私の鼻に感じた不思議な香いが、ここでも風と一緒に運ばれて来た。私の乗ってきたタンゲ村の乗馬も、いつの間にかここに放牧されている白い野生馬と一緒に草を喰みつけていた。

この日の偵察隊は、ウルベガックに前進キャンプを設けて、その先の未知のルートをナッカーリ・ダモダール・クンダへ通ずる道を発見すべく、ウルベガックより2隊に分れて偵察しているはずであった。その日は午後3時頃TBSスタッフがタンゲ村より移動して来たが、タンゲ村にはまだ若干の荷物が残っているので、ナイケ1人と数名のポーターがタンゲ村に下って行った。そして、午後の4時には偵察隊と荷上げ隊も戻って来て、佐久間と土谷がウルベガックの仮の第二デポ・キャンプに残留することになった。ウルベガック(Urpegak)はチベット語(ロー方言)ではウ・ベ(dwudpe)と呼んでいるようである。

翌日の5月9日は曇ってはいたが、まあまあの天気であった。今度はTBSスタッフだけナマ・ゴートに残して全員ウルガベックに移動することになった。

ポーター達は既に道が判っているので、朝の7時半に、隊員達は8時にはナマのキャンプをたたんで出発して行った。ナマにはTBSのグリーンの天幕が一張りだけになった。私は8時半頃馬に乗って隊の後を一人で追った。ナマの泊り場の後にある小さな尾根を一つ乗越すと、それからは広い盆地になった草原が現れて来た。昨日佐久間が、ナマのゴートの上に素晴らしい広いゴート(牧草地)があって泊り場としては快適なところだが、水場がないので狭いがナマにキャンプをつくったといっていたが、その広いゴートがこの草原だっ



▼ナマ・ゴートの子供達とムスタン・ヒマール



たわけである。草原の真中を真直ぐ横切って進むと、草原の外れは丘になっていて、道は丘の上から浅い谷の草原に向かって下っていた。この辺の地形は丘陵の連続なので、何処を通っても方向さへ確かめてあれば、容易に進むことが出来た。道といっても家畜の放牧道なので、至るところ網の目の様に広がっていて、一体どの道が本当の道なのかさっぱり判らない。丘より下り始める前方にドロミテの岩峯群が櫛をさかさにしたような姿で、ガスの中から現れ始めて来た。そして、その下の大斜面をポーター達が自由勝手に道を取りながら、岩峯群の下に向かって登って行く光景が蟻のように小さく眺められた。あと20分もすれば追いつけそうであった。

岩峯群の下にある草原の斜面は、実際に登って見ると、見た目よりはるかに急な斜面で瓦礫のゴロゴロした斜面であった。斜面を半分ほど登ると、左手の小尾根に急な斜めに登る道があった。ポーター達は皆その山腹についている道めがけて上り、尾根の上部に出たようである。急な瓦礫の小径を登りつめると、そこは小さな台地になっていて、隊員やポーター達全員が休んでいた。既にドロミテ岩峯群は目の高さにあった。

ここでは馬の鞍を外してやって、小1時間も休憩した。前方にはロー・マンタンの緑のスロープが手の届くような距離に眺められ、それより左手チャランからガミーに続くカリガンダキの河岸段丘が立ち並び、その上部にはムスタン・ヒマールからドルポにつながる雪山が屏風のように展開していた。ガミーよりチャランに行く途中にある、大きなオボのある峠に連なる灰色の山も、箱庭の

石のように小さく眼下に見下ろされ、なつかしかった。

休憩した台地よりは石のゴロゴロした登り道となり、山腹をトラバースするころには、道は急な粘土の斜面につけられていた。ふと前方を見ると、小さな峠がドロミテ岩峯より連なっている稜線上にあって、その下の斜面には砂岩の大きな岩塊に洞穴が二つ明けられていた。近づいてよく見ると、洞穴内の広さはそれぞれ6畳敷きぐらいの大きさであるが、最近人の住んだような形跡はなかった。

峠は日当たりの良い斜面で、眼前にはライオンの頭のような形をした岩峯が、デー・チャン・コーラの一支流の対岸にあった。私達はこの特徴のある岩峯を「ライオンズ・ヘッド」と名付けた。峠の高さは4,510mであった。

峠よりは、ドロミテ岩峰の稜線の裏側に山腹道がやゝ水平につけられ、その道の果てには、劔岳の大窓をもっと大きくしたような岩の窓が望見され、その奥には雪を着けたヒマールが雲の中にあった。きっと、あの雪を着けたヒマールは、ブリクティの前山に違いない。と皆で決め、ヒマールの現れるのを待って1時間近くも峠で待機したが、ついにブリクティらしいヒマールは姿を現さなかった。この劔の大窓を彷彿させる岩峰の間にある岩の門がウルベガックで、高度にして4,600mの高さがあった。

峠よりは砂岩の岩塊の下を下り、それよりは緩い山腹道になっていた。山腹道の左側には細長いゴートがあったが、今は家畜は何も放牧されていなかった。ウルベガックは大きな岩のコルになっていて、その向こうは谷になって下っているように見えた。しかし、この窓は堆積がうづ高く盛上っているところで、谷はもっと奥に続いていた。このデー・チャン・コーラの一支流は、このウルベガックの堆積の下を水は伏流になって流れているのである。

私はナマの第一デポ・キャンプより実働3時間かかって、ここウルベガックの第二デポ・キャンプに着いた。本隊やポーター達は未だなかなか来ないので、既に張られてあった偵察隊の天幕にもぐり込んだ。この窓は風が吹き突けなので、風も強く温度も下がって来たので寒くなって来たから



である。私はまだ梱包が来ないうちは着の身きのまゝで馬に着的物を何もつけてなかったのだ。1時間程で、ポーター達が上がって来たので、私達のメイン・テントをウルベガックの窓の窪地に風をよけて張った。もうこの辺には残雪もあり、岩壁には氷が張りつき、その氷の融水が岩壁を伝って小さな滝になっていたので、飲料水は楽に手に入れることが出来た。

翌朝目を覚ますと既に小雪が降出しており、あたり一面にガスが下りていて、視界は全くゼロに等しかった。今日はどうでも、こうでもナッカリ・ダモダール・クンダのBC予定地まで行かねばならないので、朝8時半馬上の人となった。

本隊はウルベガックの窓より、この谷をどんどん上流に遡り、最後の5,000mの岩峯のCOLを越えて、反対側のデー・チャン・コーラの源流地帯にルートをとった。この5,000mの岩峯のCOLは「聖地の扉」とも「聖地の門」とも呼ばれており、極めて危険な岩場を乗越すことになるのである。したがって、馬やゾブキョは絶対に通れないという。出発の時、タンゲ村のボテが、馬で行くのならこの先で、左側の岩尾根を越して、タンゲ・コーラに下り、それよりメ・ラという峠を越えるとナッカリ・ダモダール・クンダに出られる。迂回路な

ので、1～2時間余計にかかるが、危険度も少ないのでその道を辿ったら良いだろうと言われた。私は馬方の少年に、

「お前はその道を知っているか」と聞くと、

「自分はその岩尾根を越える道は行ったことはありません。だが村の大人達に良く聞いておくから大丈夫です。タンゲ・コーラからメ・ラを越える道は一度通ったことがあるので間違えることはないでしょう」と言うので、私はベース・キャンプ入りを馬で行くことに決心した。

私はアノラックを着込んでウルベガックの第二デポ・キャンプを8時半に出発した。ポーター達は私の前の堆積の丘をおりから降りしきる雪の中を登って行った。堆積の丘を登り切ると、又、ふたたび谷が現れ、谷には水が流れていた。積雪はもう既に10センチほどになっていた。20分程流れに沿って登り、対岸のガレ場をジグザグに登って岩尾根の一角に辿り着いた。稜線の上には細い踏み跡が残っていた。タンゲ・コーラ側は濃いガスの中に切り立っていて何も見えない。この稜線を前に行くのか、それとも戻るのかさっぱり判らない。

「道が判らないよー」と少年は下の谷に行くタンゲ村のポーターに向かって大声で叫んだ。



「今いるところに道がついているかよー」下の方からガスの中を通して応答があった。

「細い道が尾根についているぞー」と少年が、又、怒鳴ると、下のガスの中から、

「道があったら、道がなくなるまで、どんどん戻れ」と、又、応答があり、それよりは何の返事も返って来なくなった。尾根が極めて細いので、私は馬から下りて私達は岩尾根を戻った。すると大きな岩峯が尾根をふさぎ、道はそこで途絶えていた。

そこは丁度岩稜の小さなコルになっていて、タンゲ・コーラ側に急なガレ場がガスの中に見えた。私達は馬を一応岩稜のコルに止め置いて、そのガレ場を下った。50mも下ると岩が庇の様に張り出した下にテラスが現れた。馬子の少年は、

「私はこれから下に行って、下る道を探して来ますから、サーブはここで待っていて下さい」といってガスの中を下って行った。雪はいよいよ降りしきり、ガスはいつ晴れるか全く判らない。はるか下の方から、ガスを通して犬の吠える声が聞こえてくる。この下の方に遊牧民の天幕がきつとあるに違いない。こんな山の中にも人家などある訳はないからである。この旅も終りに近づいた1ヶ月後、メ・ラからタンゲ・コーラを下った時、カムバの駐屯地があって、何十軒も建物のある中で、1軒だけ破壊されずに屋根のある建物があった。その建物の中にはデー村の遊牧民の夫婦が住んでいた。犬の吠える声はそこからガスの中を通して

聞こえて来たのである。

約1時間程して少年は息をきらせながら上がって来た。そして、

「これからゴーマル・ゴート迄道がついています。ですが、全部岩場を下りるので、下のゴートまで歩いて下さい。時間にして1時間もあれば充分です」

私達二人は、馬の手綱を引いて、急なガレ場をジグザグに下った。少し下りたあたりより大岩壁に、人一人がやっと通れる道がつけられていた。岩場にはところどころ小さなビャクシン（シュクバ）が叢生し、潤葉樹の小灌木も、ところどころ見出だされた。岩場のへつりで悪場が2ヶ所程あり、そこだけはどうしても馬の鞍を外さないと、通すことが出来ないのも、馬と鞍を二度に分けてそこを突破した。やがて岩場も緩くなり、ビャクシンの密生している斜面に小径が現われ、その小径は下の草原に続いていた。この岩尾根をタンゲ・コーラに乗越す道は、カムバの造った間道で、下の草原がゴーマル・ゴート（Ghomar Goth）なのである。

私達は急な岩場から解放されて、今平らな草原を進んでいる。視界が全くゼロなので、この辺の地形がどうなっているのかさっぱり判らない。馬方の少年は下の方を指差し、

「ここから15分も下ったところに、昔カムバが沢山住んでいたところがあるんです。私はカムバが住んでいたじぶんのことは知りませんが、カムバ・

キャンプのあったところを、むらの人達はゴーマル・ゴート・カムバ・ケームと、そう呼んでいます」カムバ・ケームのケームは英語のキャンプがなまった言葉だと思う。

ゴーマル・ゴートの平らな草原を進んで行くと、行く手には広い瓦礫の斜面が現われ、カラガナの灌木が点在していた。そして、ところどころ岩混じりの斜面を、馬でジグザグにガスの中を登ると、いつの間にか、例の真黒い泥の斜面に変わって来た。傾斜も大部きつくなって来たので、頂上に近いことが判る。賽の河原のような岩混じりの道になってくるあたりで、急に風が強くなり始めて来た。いよいよ頂上らしかった。やがて行く手に小さなオボをガスの中に発見した。メ・ラ峠の頂上である。高度にして4,980mを私の高度計は指していたが、天気が悪いので、実際の高度はもう少し違うかもしれない。後で天気の良い日に偵察隊が記録した高度は、4,850mであった。ゴーマル・ゴートより休みなしでの1時間余りの登高であった。

峠の上は吹雪になっていた。少年は、「こゝから1時間も下るとナッカリ・ダモダール・クンダの聖地に行けます。今日天気さえよかったら、この右の方はヒマールが続いていて、眺めがとても良いんですよ」

「そのヒマールって奴は、ブリクティなんだね」

「さあー、私には山の名前は判りません。大人達だって判ってないでしょう。だって山の名前はみんなヒマールかカンですよ」

メ・ラ峠より下りの道は、やはり泥の固まった斜面で、何本も何本も雨裂の溝が走っていた。傾斜も上の方は馬で降りるには急過ぎていたが、私は早くこの吹きさらしの斜面から解放されたかったので、脚を締めながら下った。しかし、私はズボンの下には下着もはいておらず、上半身も綿のカッター・シャツにアノラックだけである。少年は既に羊の毛皮のチベット服をまとっていた。手袋もないので、手綱をとる手はもう感覚がない。20分程下ったところで、私は堪えられなくなり、馬から降りて歩くことにした。そうすれば、少しは暖くなるだろうと思ったからだ。

そのうち傾斜も緩くなり、右手の山より谷川が流れて、水が滔々と瀬音をたてていた。綺麗な水である。川を2本程渡ると牧草地になり、その先の方に私達の天幕が張られてあった。時間にして6時間、2時少し過ぎに、ナッカリ・ダモダール・クンダのベースキャンプに着いたのである。本隊より約2時間の遅れであった。本隊のコースは、5,000mの岩稜のCOLを越えるのに足場が悪く、その上落石が激しかったので、ポーターを通すのにフィックス・ロープを張ったとのことであった。

HAJ 華甲望年会 開催のお知らせ

記

本年で第5回目を迎える日本ヒマラヤ協会主催の「HAJ 華甲望年会」が下記のとおり開催されます。

当日は、今夏カラコルムのパサー峰(7,484m)で開催されたHAJ サマー・キャンプ登山隊の報告と、本年めでたく還暦を迎えられた方々6名をお迎えしてお祝いし、出席者一同杯を汲み交わし、行く年を惜しみ来る年に思いを馳せて懇談するものです。

参加を希望される方は、11月30日までにHAJ事務局までハガキ・電話・FAXでお申し込み下さい。

1. 日時：12月13日(土) 19時～21時

2. 場所：東京、東池袋4-7-7

「かんぼヘルスプラザ東京」

☎5952-6881

JR池袋駅東口下車徒歩8分

地下鉄有楽町線東池袋駅下車徒歩2分

3. 会費：8000円

4. 当日お祝いする華甲該当出席者

梅澤佳子(神奈川) 前島孝夫(長野)

野口信男(東京) 佐藤邦彦(福島)

松元邦夫(東京) 熊村秀人(大阪)

ネパール山岳協会（NMA）が主管して、ポカラに建設中の「国際山岳博物館」に対して、資金支援要請があったのは、1997年秋のことであった。

日本側では、この要請に応じて、日山協、労山、JAC、HAJ、日ネ、HAT-Jの山岳関係6団体が「国際山岳博物館関係団体連絡協議会（会長：坂口三郎日山協会会長）」を立ち上げ、協議を重ねた。

具体的な構想のないまま、資金支援だけを求められることについては、幾つもの懸念があったり、ネパール側の中心的存在であった、当時のNMA会長ダワ・ノルプ氏の急死などもあり支援活動の一時棚上げの提案などもあった。

また、ネパールに援助した場合、インド、パキスタン、中国などヒマラヤ諸国から同様の要請があった場合、どの様に対応するのかなどについての懸念も論議されないままとなった。

このプロジェクトには、当初から援助に対する日本側の特定の団体の複雑な経緯があり、結局、資金援助は『一度だけ』との堅い約束の下、募金を開始、2千万円+αを支援した。

資金支援の傍ら上記「連絡協議会」の実行委員長であった八木原罔明氏（当時日山協国際部長）らが奔走して、博物館に学芸員を派遣する道を探り、変則的になったものの、2002年にJICAシニア海外ボランティアとして安藤久男氏（北海道大学山岳部OB）が派遣され、専門学芸員として従事している。

この国際山岳博物館建設の話は古く、1983年3月に日本側に打診があった。当時のNMA会長は、前国王の妹の夫であるクマール・カドカ殿下であり、NMAではその時、既に現在建設中の建物のある土地を所有していたのである。

博物館の敷地は約5万平方メートル、本館の建坪は3110平方メートルで、セティ川の東側に位置している。

2002年5月29日、ソフト（仮）オープニンが開催され、地元民を含めて3日間で約5万人が集まった。



今回来日したナビン・ギミレさんは、来年2月5日に予定されている博物館のグランド・オープンのために、日本の博物館実務を知るためJICAの支援で研修を受けた。

ドリヴバン大学で土木技師、運営・監理などを学び、1995年卒業と同時にNMAに就職。博物館のプロジェクト・マネージャーの立場にある。

日本での研修の主体となっている「大町山岳博物館」では、3週間程の滞在中に、資料の整理・保存、企画展・特別展の立案から開催まで、山岳環境の保全、ライチョウとカモシカの現地調査と飼育研究、日本のヒマラヤ登山の歴史と遭難など多分野にわたって研修を受け、その合間を縫って「全日本登山体育大会」にも顔を出し、ポカラの宣伝を行った。帰国後の成果に期待したい。

[1974年8月8日生まれ、独身。]



地域ニュース

《ネパール》

ヒムルン・ヒマールで雪崩遭難

10月2日正午頃、パーバリアンクラブがヒムルン・ヒマール(7,126m)に派遣した登山隊が標高約6,000m地点で雪崩に襲われた。事故当時は野沢井歩隊長(39)、今村裕隆(44)、川原庸照(30)のオーダーでアンザイレンしてトラバース中であった。最後尾の川原隊員はクレバスに2~3m落ち、埋没を免れ、自力脱出し今村隊員を掘り起し、2人で野沢井隊長を掘ったが、既に絶命していた。同隊は当初ヒムジュン(7,140m)の初登頂を目指していたが、隊員が1名不参加となったため、隣接するヒムルン・ヒマールに転進した。同峰は、1992年北海道大学隊が初登頂しており、事故は同隊のC2下の斜面を通過中に発生した。

《中国》

シシャバンマ中央峰に登頂

JAC東海支部が冬期ローツェ登頂の事前トレーニングで入山したシシャバンマ中央峰(8,008m)に10月14日、田辺治隊長(42)鈴木正典(41)、北村俊之(41)、山本茂久(35)、千田敦司(29)各隊員が登頂した。尚、同峰には、9月26日に片山右京(40)も登頂している。

Books

イエティの伝言 [薄井ゆうじ 著]

本書は、「文芸ポスト」に2000年から2002年まで連載されたものに、加筆修正を施したものだ。

未確認生物「イエティ」からの視点で人間の文化、文明を問う幻想小説である。

主人公「安治川」がカトマンズへ向かう機内で、サリー姿のフライトアテンダントに話しかけられる場面から始まる。

3年前、「安治川」は偶然にイエティを捕獲し、「アジカワ」がイエティの固有の学名にもなる。当時は世界的に報道され、沸騰した好奇心も次第におさまり、彼の存在も忘れられたころ、大手の

週刊誌の名でイエティとの対談を依頼される。

カトマンズから数時間のコロニーに車を駆って行くと、「アジカワ・イエティ」の環境は大きく変化していた。それは3年前、イエティと初めて対峙した時に感じた、畏怖と猥雑さを兼ね備えた吸引力が神の招聘の如く、抗える物はなかった。

ここからのストーリーを語っては幻想小説の意図があるまい。読者それぞれの読書遍歴、好み、人生観などによって、荒唐無稽と取るか、活字化されたヒト社会の基盤に意味を感じるか、本を読む行為を改めて認識する機会ともなるであろう。

いずれにせよ、読書人がイソップからハリポッターまで、ミステリアスな物語や啓示的な内容を求めるのは共通のものである。

現在、「イエティ捜索隊」が活動している時点で本書に触れて想うは、何らかの存在に関する手懸かりを得たとしても、多くの「？」マークを付けた報告として欲しい、と願う。(記：出口 當)

B5版 282頁 2003年1月1日刊

榊小学館 1,600+税

ヒマラヤから

ヒムルン・ヒマール便り

ナマステ！パスーは一段落ついた頃かと思いません。ご苦労様です。

9月9日、予定通りカトマンズを出発しました。前日カトマンズ市内6ヶ所でマオイストによる爆弾テロがあったため、軍・警察の検問がいつそう厳しくなりました。何とかカトマンズを離れ峠を下ると、下の村ではマオイストによるバンダ(ゼネスト)。通行止めとなってしまったが、1時間程で軍によって通行可能となった。予定通りの時間でムグリン。ここの美味しいダルバートにも無事ありつけました。ドウムシ〜ベシシャハール間の道路も1996年と比べ格段に良くなっており、15時にはベシシャハールへ到着しました。

10日からキャラバン・スタート。緑豊かなマルシャンディー沿いに、美味しいチャンとダルバートが楽しみの一つです。しかし、日中は蒸し暑く、禁断のビールに手をだしたりもしました。

3日目。マルシャンディーに掛かる120mの橋が落石により破壊されてしまいました。村人の話だと2〜3日で下に新しい橋を架けると言うので、チュムチャの村で停滞することに決める。しかし翌日どうもかなりの日数が掛かるらしいので、私達で荷物、ポーターを渡すことに決め、翌朝早くから橋まで荷物を移動。橋はワイヤー6本で掛かっていましたが、右端の3本が切れ、対岸側は足場の板も全く無い状態でぶら下がっている。残った左側のワイヤーや金網を伝って荷物を運び、対岸のワイヤーだけの所はロープで下に降ろす作戦。これは意外とうまくいき、28個の荷物を無事渡すことが出来ました。

ということで、カン・ラ越えのルートはやめて、ナル・コーラのルートへ変更。ナル・コーラは深いゴルジュの中という感じで、進むにつれチベット風の荒涼とした風景へと変わっていきます。マルシャンディーのコトより2日間でプーガオン。明日9/18BC入りします。

ナル・コーラへ入ると天候は良く、正にチベットといった感じです。

それではこれから登山活動がんばります。皆、元気にやっています。

17 Sep 03 チーム・ベリヒマール03 野沢井 歩

■ 寸 感 ■

野沢井歩専務理事遭難の報に日本中に激震が走った。隊の顔振れからすれば決して難しいルートではないと思う所で事故は発生した。それにしても8月のパスー峰のクレバス転落では、不運にも足がはさまったため収容に時間がかかり死亡する結果となり、ヒムルン・ヒマールの事故では、最後尾の隊員がクレバスに転落したために、全員遭難を免れたのだ。言う言葉もない。(山森)

事務局日誌 (10月)

- 2日(木) 野沢井歩専務理事がネパール、ヒムルン・ヒマールで遭難第一報入る
3日(金) バーバリアンクラブにルームを遭難

対策本部として使用承諾し、同会を側面から支援。以後18日まで

- 7日(火) パスー峰収容隊関係の日・パトラベルからの請求書を松山昭会員が持参
9日(木) ヒマラヤ384号発送
10日(金) 華甲望年会該当出席者へ案内状発送
15日(水) 野沢井専務理事の遺骨が家族と共に帰国、羽田出迎え(関係者多数)
16日(木) 野沢井告別式を関係者へ通知
20日(月) パスー峰共済請求書を提出
21日(火) 中国登山協会から野沢井専務理事の弔電入る
25日(土) 野沢井歩専務理事告別式(於:水戸)
27日(月) 東京集会(19名)
28日(火) HAJ関西集会資料送付
国際山岳年報告書原稿送付

■野沢井支援 [35万円] 堅田秀子 [10万円] 橋本しをり、土器屋由紀子 [3万円] 佐藤邦彦、電々九州山岳会 [2万5千円] 大阪山の会有志

■財務支援 [5万円] 天城敏彦 [3万円] 古関正雄 [1万円] 澤田幸子

東京集会のお知らせ

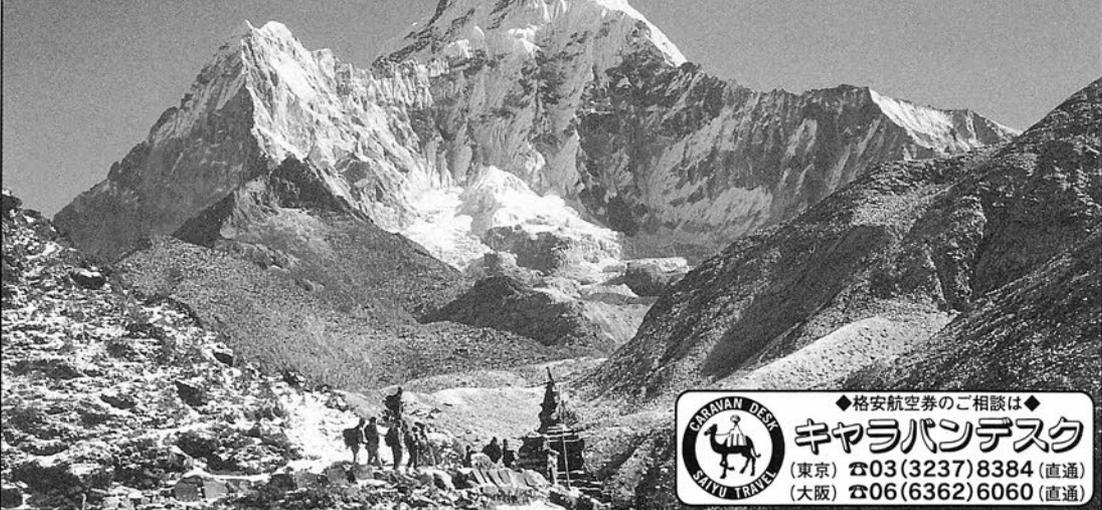
- 日時 11月25日(火) 午後7時〜
内容 野沢井専務理事追悼
場所 HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

ヒマラヤ No.385 (12月号)

- 平成15年11月10日印刷 15年12月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

遙かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・
現地手配までお引き受けいたします
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・
中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャロパンデスク
 (東京) ☎03(3237)8384 (直通)
 (大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のパイオニア ■本社 / 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
 岩波書店アネックス5F ☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
 **株式会社 西遊旅行** ■大阪営業所 / 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F
 国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員 ☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
 西遊旅行ホームページ (http://www.saiyu.co.jp) お問い合わせ・お申し込みにフリーダイヤル ☎0120-811395
 (通話料無料)をご利用下さい。

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-1-14 日比谷中ビル6F
 TEL: (03) 3595-4830 (代)
 http://www.tokyo-np.co.jp/tbook

山書散策 今まで数多く発行された山書、何を読んだらよいか、そんな時の指針として「山」の選書から好評。	登山の運動生理学百科 ひとつひとつ合理的で安全な登山ができるのか、を「ヒマヤ」など高所登山実感を踏まえて、分かりやすくまとめた。	中高年登山・なんでも百科 「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しめるよう、中高年登山の虎の巻。	新・山靴の音 選履をわかせた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。	女性ガイドのしなやか登山術 常識にとらわれず、自在に知恵を働かせれば山はもっと素敵になると呼びかける、女性登山ガイドのユニークな登山講座。	すぐ役立つ 新山の雑学ノート 第1集 山での話題が盛りだくさんの「山」の雑学が登山をより楽しくより安全にしてくれる。	中高年の雪山入門 低山から夢のヒマラヤまで、「トランル」を未然に防ぎ、白狼の大自然を満喫しながら、雪山歩きを楽しもう。	すぐ役立つ 山のメモ帖 「山人」連載の「山の雑学ノート」から95編の話題を取り上げた、山のワンチクを深め、安全登山の指針となる一冊。	すぐ役立つ 記念日の山に登ろう 人それぞれ記念日の日付と標高が致する山はここに。	すぐ役立つ 山の気象と救急法 山の気象予報を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。	すぐ役立つ 北アルプス編 北アルプス全域を代表とする7つのルートを分かりやすく解説したルート案内書。	山小屋の主人の炉端話 著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る人話の取って置きのお話。	最新 クライミング技術 ジムクライミングからボルダリング、フリークライミングまで、すべてのロッククライマーに必須の書。二つとらの技術を単なるマニュアルとしてではなく、その意味や選定基準を改めて詳しく解説、実践的なクライミングのポイント、心構えなども細かくアドバイス。
河村正之 著 1500円	山本正嘉 著 2000円	福島正明 著 1500円	芳野満彦 著 1262円	樋口英子 著 1500円	岳人編集部編 1400円	福島正明 著 1600円	岳人編集部編 1400円	石井光造 著 1300円	飯田睦治郎 著 桜井博幸 著 1359円	廣川健太郎 著 2500円	工藤隆雄 著 1500円	菊地敏之 著 1600円

※本体価格に消費税が加算されます。

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
- 新宿西口店/〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
- 神田登山店/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-3295-0622
- 神田本館/〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
- 八王子店/〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
- 大宮店/〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
- 高崎店/〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
- 川越店/〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
- 甲府店/〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
- 宇都宮今泉店/〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
- 太田高林店/〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
- 松本店/〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
- 長野店/〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
- 新潟店/〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

- 新潟とやの店/〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
- 仙台店/〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
- 秋田広小路店/〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
- 盛岡大通店/〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
- 札幌店/〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
- 北十二条店/〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
- 伏古店/〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
- 平岡店/〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
- 外商部(メールオーダー係)/〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004